

目的や意図に応じて自分の考えを書く力を育てるための 指導・支援の在り方

—国語科における単元構想の工夫—

植地 洋子

本研究では書く力を高めることに焦点を当て、「書く」活動と、「読む」「話す・聞く」活動とを関連させる学習の在り方を追究しようとした。実践授業では、子どもたちの書きたいという意欲を高めたり、何のために書くのかという目的をはっきりともたせたりすることができるように、計画的に読む活動や話し合う活動を充実させる単元構想の工夫を試みた。単元を通した中で「書く」活動と「読む」「話す・聞く」活動とを関連させることで、書く必然性が高まり、繰り返し書くことを通して、書く力が身につくのではないかと考えた。このような学習過程を重視する中で、目的や意図に応じた書く力を育てるための指導・支援の在り方について提示した。

第1章 国語科教育で求められる力

第1節 諸調査の結果から見える課題

文部科学省は平成19年度「全国学力・学習状況調査」を行った結果、指導改善のポイントとして「文章を要約したり、条件に即して書き換えたりする言語活動の充実」が必要であると述べている。

本市教育委員会が行った平成19年度「学力定着調査」では、「書く能力」において「具体的なモデルを提示して指導すること」「書く様式について発達段階に応じて系統的に身に付けること」などの指導の改善が必要であると述べている。また、「読む能力」に関する結果分析については「全体的に見て読む能力に課題が見られる」と報告されている。各領域の力はそれぞれ単独に育てるのではなく「書くこと」「話すこと・聞くこと」「読むこと」との関連を図りながら学習展開を工夫することが大切であると考えられる。

第2節 これからの国語科学習に求められる力

学習指導要領の改訂に当たり、国語科の改訂の要点の中に、「学習過程の明確化」や「言語活動の充実」が挙げられている。「学習過程の明確化」では、書くことの指導事項において、「課題設定や取材に関する指導事項」や「交流に関する指導事項」が加筆・修正されており、学習の流れを大切にした学習が求められている。また、「言語活動の充実」では、言語活動を領域ごとに見るだけではなく、領域相互に関連する力についても理解し、指導に生かすことが大切であると考えられる。

第2章 目的や意図に応じた書く力を育てるための単元構想の工夫

第1節 なぜ単元構想をすることが大切なのか

単元構想を図るよさとして、次の3点が挙げられる。

- ・単元を見通して、児童が主体的に学習を進めることができる言語活動を組み入れること
- ・書く機会を計画的に位置づけ、自分の考えを書く活動の充実を図ること
- ・単元でつけたい力を示し、めざす児童の姿を明らかにしながら言語活動を繰り返すこと

これらのことを大切にした単元構想を行い、研究を進めた。

第2節 書く力を育てるための授業を展開するために

児童の主体的な学習活動となるように、単元の学習過程をプロセス1・2・3とした。図1は、目的や意図に応じて書く力を育てるために考えた単元構想図である。

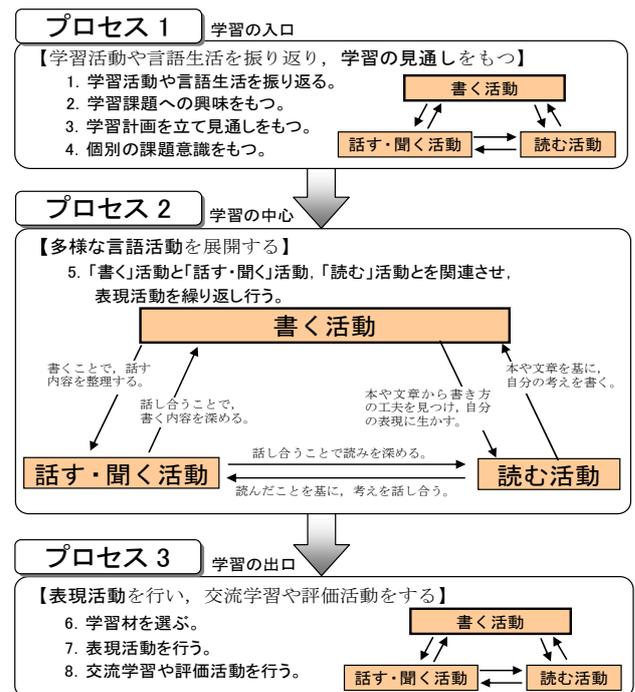


図1 目的や意図に応じて書く力を育てるための単元構想図

プロセス1においては学習の見通しをもつことができる学習活動が大切であると考えた。そのため、今までの学習活動や言語生活を振り返る活動などを重視している。プロセス2においては「書く」活動と「話す・聞く」活動、「読む」活動とを関連させ、表現活動を繰り返し行う学習活動を進めた。読み取ったことを基にして書く、書くことで話す内容を整理することができるといった活動を展開し、プロセス2からプロセス3へとよりよくつながる表現活動を大切に考えた。そして、プロセス3では表現活動を重視し、交流学習や評価活動などの学習活動を行う。これらの3つの学習過程を大切にすることで児童が学習に見通しをもち、書く力を育てる学習を進めることができると考えた。

第3章 小学校第5学年での実践を通して

第1節 推薦文を書く授業実践

プロセス1の学習においては、読書の経験や読んだ本について伝える方法について話し合う活動を行った。また、モデル文を使って、感想文と推薦文の書き方の違いを見つける学習を行った。プロセス2の学習においては、「書く」活動と「話す・聞く」活動とを結び付けて学習を進めた。

図2は、児童が考えた文章の構成を基にして、話し合っている様子である。自分が考えた推薦文の構成について話し、それに対して友だちから意見をもらう。話し合うことで児童は、推薦文に書く内容を明らかにすることができたと考える。このような活動を生かし、



図2 考えた構成を基に話し合う児童の様子

プロセス3においては、自分で選んだ本のよさを伝える推薦文を書き進めた。読む人に本のよさがわかるように、効果的な表現を使って推薦文を書く児童の姿が見られた。

第2節 放送原稿を書く授業実践

プロセス1の活動においては、テレビのニュース番組がどのようにして作られるのか興味をもつことができるように「記者メモ」を作成した。「記者メモ」とは、児童が教材文を読み、ニュース番組を作る中で、大切な過程について抜き出したものである。そして、これを基にして自分でメモを書きまとめたものである。この「記者メモ」を書

くことで、児童は学習への見通しをもつことができたと考える。図3は、教材文を読み、「記者メモ」を書いている児童の様子である。



図3 教材文を読み「記者メモ」をまとめている児童の様子

プロセス2の活動においては、「わたしの企画書」を使って学習を進めた。「わたしの企画書」は、「企画名、伝える主な内容、伝える相手、伝える目的」という視点で書きまとめている。

「わたしの企画書」を活用することで、児童は、伝える相手にとって価値ある話題について調べていこうとする姿が見られた。調べたことを基にして児童は相手にわかりやすい放送原稿を書くことができた。

そして、プロセス3では、『わたしたちの特集』発表会を開き、グループごとに発表する」学習活動を展開した。児童は互いの発表を聞き合い、伝え方のよいところや見直した方がよいところについて交流することができた。

第4章 本研究の成果と課題

第1節 書く力を育てる単元構想にするために

書く力を育てるための学習となるように、プロセス1・2・3を踏まえた実践授業を進めた。プロセス1では、学習の見通しがもてるような学習活動を行うことが大切であると考え取り組んだ。どのような学習をこの単元で行うのか具体的に児童に示すことで、意欲をもって学習に取り組む姿が見られた。同時に毎時間の授業のねらいも意識して臨むことができたと考える。プロセス2においては、書く活動を重視した。読んだことを基に書く、書いたことを基に話し合う活動を取り入れることで、目的をもって書くことにつながったと考える。書く活動を中心に、学習を進める中で自分の考えをもちながら学習する児童の姿が見られた。また、プロセス3では表現活動を重視した。プロセス1・2で学んできたことを生かすことで、児童が自信をもって表現する姿が見られた。児童が学習を振り返る中で身についた書く力を自覚することができたと考える。

これらの学習過程を踏まえ、書く様式や条件を明らかにさせて学習を進めた。また、モデル文や文章を書くときに使える言葉などを児童に提示してきたことも効果があった。このように、単元構想の工夫を行うことは目的や意図に応じた書く力を育てることに有効であったと考える。